
AMIDA

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AMIDA

【Nコード】

N5605D

【作者名】

クロフォード

【あらすじ】

皆さんが、1度は体験したことがあるだろう。修学旅行。恋の話、枕投げ……。楽しい思い出をたくさん作っただしょう……。しかしこの話は、いままで、仲良くやってきたクラスメイトと修学旅行で殺しあってしまうという、悲しくも、残酷な話である。

つかの間の平和（前書き）

中学生たちが、異世界に迷い込んでしまう話・・・。

”AMIDA”それは、一度入ったら最後・・・。

99%の確率で、死んでしまう。

もしあなたが、”AMIDA”に迷い込んだときのために・・・
この小説をあなたにささげます。

つかの間の平和

村立鎌谷中学校。富山県五縄村という、山奥の小さな村にある、創立30周年を誇る村立中学校である。

この学校は、総生徒数が、345人の学校である。

「キンコンカンコンコン」チャイムが鳴り響いた。
俺の名前は、高田^{たかだ}武士^{たけし}。3・4のスポーツ万能男だ。

6月18日（木）今日は、3年生の修学旅行前日指導の日。
「えー、では皆さん、今日は早く帰って、十分睡眠をとって、明日からの、2泊3日の修学旅行に備えてください。」

校長先生の話が終わり、3年生は帰宅した。

初夏の暑さが、俺たちの体力を少しずつ奪っていく。

桜庭が話しかけてきた。

「なあ、修学旅行で、朝とかに、キャッチボールやらない？」

桜庭とは、俺の親友で、同じクラス。

フルネームで、桜庭^{さくらば}友司^{ともじ}と言う。

こいつとは、幼稚園の頃からの大親友で、とても仲が良い。

しかし、小学校高学年になってから、桜庭は急激にモテだしたわけ
で、

とても羨ましい。

「おお、いいねえ！やろうぜ！」

桜庭とは同じ、野球部で、俺はエース、桜庭はショートだ。

「グローブとボール、牛島に見られないようにしろよ」

牛島とは、俺らの担任 兼 野球部顧問。

昔の学校にいそうな、現代の女子に嫌われやすい熱血教師だ。

フルネームは、牛島^{つじしま}義則^{よしのり}

「ああ・・・そうだった・・・俺らの担任牛島だった・・・。」

俺は、少しため息をついた。

「何ため息ついてんだよ！俺たち同じ就寝班なんだから元気出せよ！」

ああ、そうだった・・・

そう思うと、俺は少し元気が出た。

「あつ、もう家の前か・・・。」

桜庭の家は、学校まで歩いて10分と、かなり近い。

「じゃな！また明日！・・・遅れんなよ。」

「わかつてるよ！じゃ、また明日。」

「ああ！」

バタン！ドアが閉まった。

ふうっと、俺はひとつため息をついて、家へと帰った。

何故か、今日は眠い。今日は、かえったら、すぐ寝よう。

「ただいま。」

「おかえり。」

母だ。

「武士、明日着てく服、どっちがいい？」

ああ、もつどつちでもいいから早く寝させてくれ。

「・・・こっち。で、そっちは次の日着るよ。」

「！そうね。それがいいわ。」

「で、俺もう寝たいから、風呂入るよ。」

「あらそう。でもお風呂沸いてないわよ？」

「じゃあ、シャワーでいいよ・・・。」

俺はさっさとシャワーを浴び、コップ1杯の

プロテインを飲み、布団に潜り、

すぐに深い眠りについた。

つかの間の平和（後書き）

まだ話の最初です。まだ、何か分からないでしょうが、これから、あなたのために、書いていきます。

あなたが、”AMIDA”に迷い込まないように、次話の前書きに書き込んでおきます。

悪夢の始まり（前書き）

あなたは、修学旅行に行ったことが何回ありますか？

あるいは、旅行に行ったことが、何回行ったことがありますか？

まだ行ったことのない人、これから、旅行に行く機会のある人、

そんなときは、”4”の数字や、Aのついた乗り物には、乗らない
てください。

まして、この小説を見て、乗ろうとしないでください。

”AMIDA”に、引きずり込まれますよ。

そして、本当に死にますよ。これは警告です。

多く狙われるのが、バスです。

とくに、トンネルに入るバスには気をつけてください。

悪夢の始まり

チュン、チュン。

「・・・ふぁー・・・。」

日の光がまぶしい・・・朝か・・・。

今は何時だろう・・・。

「あっ!!」

一気に目が覚めた。

A M 5 : 4 5 集合時間の30分前だったのだ・・・。

ヤバイ・・・このままだと、遅刻してしまう。

早く支度しなければ・・・。

「と・・・とにかく飯だ。」

パンを1枚食べ、牛乳を1杯飲んだ。

身支度を終えた頃、母が起きた。

「あ・・・ごめんねえ、起こさなくてえ・・・。」

よくあることだ。

俺は、あえて何も言わなかった。

残り10分・・・走れば間に合うな・・・。

「いってきます!」

「いってらっしゃい。気をつけるのよ、楽しんできなさい。」

ザワザワ・・・。

「遅いなあ、武士。まさか、寝坊したか・・・?」

はあ、はあ。間に合った!!

「ぎりぎりセーフ!! あぶねー!」

「セーフじゃない! 完全アウトだ! ボケ!」

ゴツッ!

「イテッ!」

でた、牛島のゲンコツ。昔の映画などでよく見るやつだ。

「スス、スンマセン!!」

「まったく、本当にお前ってやつは・・・」

「えー、それでは、生徒はバスに乗ってください。

1組は1号車、2組は2号車、3組は・・・」

「・・・ほら、さつさとバスに乗れ!」

「はい。」

ナイス、学級委員長!!

「高田って、ホント馬鹿だよなー。」

「むっ。」

今、話しかけてきたのは、

うちだりょうこ
内田涼子

俺のタイプで、かわいいが、好きになれない。

しかも、喧嘩強い、女子のリーダー。人気者で、頭も良い。

「うるせー、黙ってる。」

「ふんっ、あんた、あたしに勝てるの?」

実のところ、俺は、こいつに勝ったことがない。

「ンだと、てめえ!やんならんぞ!」

「いいかげんにしないと、ぶつとばすぞ、高田・・・。」

何故、俺だけ!?

「いや、先生、こいつが先に・・・」

ゴツツ!

「いつてえええー!!」

さつきより痛かった。

「早く乗れ!!!」

「はい・・・。」

俺は、頭をさすりながら、バスに乗った。

「はい、風邪で休みの堀口龍君ほりぐちりゅう以外、みんなのりしましたね。じゃあ、出発しまーす。」

「ちくしょう、こういうときだけ態度変えやがって・・・。」

内田は、学級委員でもある。

かくして、俺たち生徒39人と、教師1人を乗せたバスは、
A M 6 : 3 0 に出発した。

悪夢の始まり（後書き）

”AMIDA”には、
本当に気をつけてくださいね。

悪夢の始まり(2) (前書き)

修学旅行バスに乗り込んだ、3 - 4 一同。
長いトンネルに入り、恐怖体験をすることになる。

悪夢の始まり(2)

A M 7 : 3 0 クラスレク開始。

「えー、では、クラスレクを始めたいと思います。」

眠いなあ、クラスレクめんどくさいから、寝ちゃおうかな。
でも、寝たら隣の内田に殴られるしなあ・・・。

「最初はクイズです！」

クイズか・・・適当に2、3問答えて、内田に、気分が悪くなった、
とでも言って、前の席に移ろう・・・。

「第1問、次のうち、ネコ科の動物を選んでください。

1、ブラウンキャット 2、トラ 3、ファグナー」

「はいっ！！」

「じゃあ、高田君。」

よっしや。

「トラ！！」

「せいかりい。」

これは簡単すぎだったな。

「第2問、去年のプロ野球の 球団の監督は誰だったでしょうか？

1、飯島 2、レオナシー 3、沢村」

よっしや！ラッキー！

「はいっ！！」

「どうぞ。」

「3の沢村平治監督だ！」

「はい正解！」

よっしや、得意分野で良かった！

さあ、もういいか、言おう。

「う・・・内田・・・。」

「ん？」

「気分が・・・悪いから前行っていいかなあ？」

「だめ。」

「え．．．？なんで．．．」

「あんた、そんな嘘ついて、寝たいだけでしょう？」
何故バレた！？」

「な．．．なんで嘘だつて言えんだよ．．．。」

「だってあんた、ついさっきまで大声出してたじゃない。」

「きゅ．．．急に気分が悪くなったんだよ！！」

「へえ、急にねえ．．．。」

「なんだよ、ほ．．．本当だつて！！」

「．．．必死ねえ．．．あんた。」

「な．．．何言つてんだよ！違えよ！！」

「なんだ、そんなにおっきな声だせるんだあ．．．。
気分が悪くてもお。」

「あ．．．。」

しまったあああ！！

「嘘ついちゃだめだよ高田君！」

「いつて！」

手の甲をつねられた．．．。

AM 8：30 クラスレクも終わり、自由時間となった。

部活の疲れが取れていないやつ、寝不足のやつは、
皆、寝てしまった。

．．．隣の内田も寝ている．．．寝顔もかわいい。

しかも！俺の手を握っている！いきなり握ってきたから、
気でも狂ったかと思ったぜ．．．。

こんな、うれしい寝相をうつならいつも授業中寝てくれよ．．．。
でも、誤解されるとアレだから、俺はしぶしぶ、手をどかした。
俺も寝よう．．．。

AM 9：37 長いトンネルに突入した。

ね・・・眠れない・・・。
くそー、眠いのに・・・。

「ん・・・。」

「おっ。」

内田が起きた。

「よう、起きたか。」

「あ・・・寝ちゃった・・・。」

ザワザワ。

「ふあ～～～。」

「よく寝た～～・・・。」

・・・！？

「み・・・皆起き始めた!？」

このトンネルに入ってからだよなあ・・・？

「変だなあ・・・。」

A M 1 0 : 0 7 トンネルに入って30分が経過した。

おかしい、絶対おかしい。

こんな長いトンネル、この付近にはないはず・・・。

この奇妙さに全員きずいている。

「なあ、おかしくない？」

「うん・・・もう30分も経ってるよね・・・。」

「もしかして、このまま出られないの!？」

「ちよつと、ふざけないでよ!!」

「ね・・・ねえ・・・前のバスいないんだけど・・・。」

「う・・・運転手さんいつからか知っていますか!？」

「いや、いつのまにか・・・。」

皆、騒ぎ出してしまった。

俺も不安になってきた。

「静かにしろ!!!」

牛島先生・・・!

「騒ぐな！大丈夫だ！もうすぐ出口だ！静かに座ってる！」
そう言つて、牛島先生は、座り、黙り込んだ。
それから、皆も何も言わなくなった。

それから10分後！

AM10:19

かなり前方だが、かすかに光が見えた！

「お・・・おい！出口だあ！」

ドツと、歓声が沸いた。

女子も男子も、何人が泣いている・・・。

そのうちの、1人が・・・俺だ・・・。

「まったく、男なのに情けないなあ。」

内田ああ！そんなに大きな声で言うなあ！

「ば・・・か・・・やろお」

俺は小さな声で言つた。

ついに、トンネルから出た！

だが、トンネルを抜けた、その先にあつたのは、
とんでもない世界^{もの}だった・・・！

悪夢の始まり(2)(後書き)

第3部終わりですっ！

いやぁ、つかれました！

これからもどんどん書いていきますので、
よろしくお願いします。

ゲームスタート（前書き）

長いトンネルから抜けた3 - 4 一同。
そこに待っていたのは、

謎の主催者XXX！

最悪のゲームが始まる・・・！

ゲームスタート

ついにトンネルから出た！

「やっと・・・出れたあゝ！」

そう、俺たちは、やっとトンネルから出ることができたのだ。

「！？」

「あれ！？」

何か変だ。

「こんなところ、あつたの？」

「運転手さん・・・ここ・・・！」

「う・・・うわあ！！！」

運転手さんが、口から大量の血を吐いて、死んでいた！

「し・・・死んでるうゝ！！！」

再び、バス内が、パニックになった。

「牛島先生！！どうすれば・・・！」

「と・・・とりあえず、俺が外見てくるから、

お前ら、バスから出るなよ！」

「！？」

先生が、「俺」と言った・・・？

いつもなら、「先生が・・・」と言ってるのに。

先生も、かなりあせっている・・・？

「怖いよー」「どうすんだよー」「死ぬの・・・？」

ああ、また・・・。

ザワザワザワザワ！

「・・・静かに待ってる・・・！」

先生・・・無理だよ・・・

この状況で、大丈夫でいる中学生なんて・・・。

「うわあー！こんなやだあー！ー！！！」

「西村！？」

いないですよ・・・。

「ま・・・待て！西村！！」

パン！

銃声が鳴り響いた。

西村が倒れている。

「西村・・・？」

「いやぁー！！」

西村が撃たれた。

そして、どこからか、声がした。

「ようこそ。皆さん。」

「！？」

「だ・・・誰だ！」

牛島先生が叫んだ。

「僕の名前はX^{エックス}X^{エックス}X^{エックス}」

「その・・・西村君・・・？だっけ？

心臓撃ち抜いたからもう死んでるよ。」

「な・・・なんだと！！」

「いやぁー！！」

パン！

また銃声が・・・。

何かが、顔にかかった。

・・・血だ！

まさか・・・！

「うわぁ！」

「ヨーコオ！！」

辺りに血が飛び散っている。

「静かにしないと、彼女みたいにするよ。」

「・・・！！！！」

「黙って、僕の指示に従いな。」

「まず最初に場所を変えよう。」

キイイイイイイ。

耳が痛くなるような高音！

「・・・ここは・・・？」

いつのまにか、場所が変わっていた。皆もいなくなってる・・・！！
後ろ、左右とも壁で覆われ、ただまっすぐな直線が前にある。

「じゃあ、君たちには、これから、ゲームをしてもらう。」

「説明をするよ。いまからやってもらうのはサバイバルゲーム、簡単に言えば”殺し合い”をしてもらう。」

「ちよつと待てよ！何で殺し合いなんか・・・！」

隣から聞こえるこの声は・・・亮！やめろ！よせ・・・、
パアン！

ドサッ！

亮・・・！

「黙って聞いてれば良かったのに・・・。」
くそ・・・！

「君たちの前に果てしなく続く道があるだろう？

その道を進むんだ。そして、曲がり角に突き当たったら、
必ず、曲がるんだ。そして、曲がったら前に進み、
人と出会ったら、殺しあってももらう。

こない場合は、待っててもらう。

最後まで残ったものが勝者。

現実世界に帰ることができる。

もし殺しあわなかった場合、どちらかを僕が殺す。

いいかい？」

何も言えない・・・。

「この世界の名は、アナザーワールド・アミダ（別世界・アミダ）
そしてこのゲームの名前は、”AMIDA”だ。」

・・・あみだ・・・？

「君たちも、僕の説明を聞いて、何かに似ていると思っただろう？」

そう、あみだだよ。」

「・・・さあ、そろそろゲームを始めよう。始まったら何言ってもいいよ。」

ああ、そうそう、武器は右の壁のボタンを押せば出てくるから。

そして、自殺もできないようにしたからご安心を・・・。」

「では、開始！」

そうして、生き残りサバイバルゲーム、”AMIDA”が始まった。

ゲームスタート（後書き）

ついに、始まった！

生き残りサバイバルゲーム”AMIDA”！！

一体、何の目的でこんなことを・・・？

最後に生き残るのは誰だ！？

不安な1日目（前書き）

ついに始まった、AMIDA！

誰が生き残るか・・・不安になる・・・1人・・・。

高田たちはこんな苦痛に耐えられるか？

そして、ついに高田が・・・！？

不安な1日目

何故こんなことに・・・

そうだ！これは夢だ！夢に違いない！

俺は自分の頬を思いつきりつねってみた。

痛い・・・頬が痛い・・・。

「夢じゃない・・・！？」

アナザーワールド”AMIDA”だとお！？

「ふざけんなよ！」

SFなんて、テレビとかでしか見たことないぞ！

「夢じゃ・・・ない・・・。」

・・・そういえば、生き残ったやつが現代に戻るって言うってたな・・・。

本当に殺さなきゃ・・・いけないのか？

今まで仲良くやってきたやつらだぞ！？

親友の桜庭や内田もいるんだぞ！？

どうすればいいんだよ・・・！

俺の精神状態は今、不安定だ。

・・・さて、落ち着こう。

殺らなきゃ殺られる・・・。

殺って、生き残ってもその後どうなるかわかりやしない。

どっちにしろ今、俺たちは、弱肉強食の世界にいることは確かだ・・・。

殺らなきゃ殺られる。

なら、悪いが俺は、殺る！

皆、悪く思っなよ！

そういえば！

「俺の武器は何だ？」

俺は、やつに言われたとおり、右の壁のボタンを押した。
シュンッ！

何かが俺の横に現れた。

・・・机・・・？

その上には・・・。

テレビ！？

「は？」

ふざけんなよ！

「きゅ・・・90年型・・・ワイドテレビ・・・？」

冗談じゃねえ！

パチッ！

「！？」

テレビがついた？

「ガオオオオオオオオオオオオオオ！！」

何か、おぞましいものが映った！

「うわあああ！」

プツン！

切れた・・・。

ヒラ・・・ヒラ・・・。

「ん？」

紙が落ちてきた。

「・・・説明書・・・かなあ、これ？」

紙にはこう書かれていた。

この武器は、かついで持っていつてください。

ピンチのとき、あなたを助けます。

「・・・。。。」

なんだろう、この気持ち・・・。

なんか・・・こう・・・、

すっげえ殺意が沸いた。

「こんなんでどうしろと？」

この武器を信じるか？

ええい、行くしかない！

・・・この武器で・・・？

すぐ死ぬかも俺・・・。

こうなったらやけくそだ・・・！

俺は、まっすぐ続く道を歩み始めた。

3時間後・・・。

「はあ、はあ・・・。」

前に、曲がり角が見えた！

来ちまった・・・。

「ええい！いまさら何を考えているんだ！」

俺は、ゆっくり曲がり角を曲がった！

待っていたのは・・・。

「の・・・野本！」

のもとしょう
野本翔。

サッカー部の背の低いキーパー。

身軽なやつだ。

「よう、高田あ。」

「悪いが死んでもらうぞ・・・！」

「ぶっ、そのテレビでかよ！」

ちっ、俺だってもつと良いのが・・・。

「悪いが俺も死ぬのは嫌なんでねえ。」

！！

「お前の武器は・・・！？」

「見てわかるだろう？」

「は・・・ハンドガン！！」

何だこの差は！？

「悪いな・・・。」

パン！

ああ・・・死んだか？俺・・・。

あれ？

生きてる？

はずしたか？

「・・・？」

俺は、おそろおそろ、顔の前のテレビに隠れながら、野本を覗き込んだ。

野本が啞然としている・・・。

「な・・・なんだよそれ！おい・・・高田！」
？

テレビを指差している・・・？

「あつ、もしかして・・・」

「ガアアアアアアアアアア！！」

やつぱり・・・さっきの・・・！

「うわああー！！」

パン、パンパンパンパンパン！

カチツ、カチツ！

「た・・・弾が・・・！！」

チャンス！

「悪いが、死んでもらうよ。」

「ひいひいひいひい！！」

俺は、野本を追い詰め、おもむろにテレビをつきだした。

すると、黒い手が出てきて、野本をつかみ、テレビに連れ込んだ！

「たすけええ・・・てえ・・・。」

「・・・連れ込まれた・・・！！？」

俺は、おそろおそろ画面を覗き込んでみた。

その瞬間！

ザアアアアアアア！

電波が悪いときの画面だ・・・。

「ぎゃあああああああ！」

「わっ！」

中からの野本の叫び声が聞こえた！

プッン！

「・・・切れた・・・。」

するとテレビの中から、何かが飛び出た！

ベチャッ！と、音を立て、落ちたものを見ると、
ぐちゃぐちゃになった肉塊があつた！

「うつ・・・！」

俺は、吐いてしまった。

おそらくこれは・・・

野本だ・・・。

するとさっきの画面は、シュレッター！？

人間をミンチにするテレビなんて・・・聞いたことないぞ？

俺はすごい武器をもらったのかもしれない・・・。
もしかして、さっき弾があたりなかったのは、このテレビのおかげ・
・・・？

なんとなく、この武器（？）の使い方が分かった。

やけに疲れた・・・。

クラスメイトを殺してしまった・・・。

ああ、なんなんだよ！このゲーム！

夜・・・。

そういえば、ここは腹がすかない。

「好都合だ！」

それより・・・。

「こんな世界にも、夜はあるんだ・・・。」

星があちこちでキラキラ光ってる。

「きれいだなあ・・・。」

「・・・今何人が生き残っているのだろう・・・？」

桜庭は、内田は、先生は、皆はどうなっただろう・・・？」

・・・？」

「星が消えてる！？」

そして、止まった。

俺は星の数を数えてみた。

16・・・20・・・24！24個？

もしかしてこれ・・・残りの人数を表しているのか！？

そしたらこれ・・・今日でもう、16人死んだってことじゃないか！？

じゃあ、桜庭たちはもしかして・・・？

不安な気持ちのまま、俺たちの1日目は終了した。

残り人数：24人

不安な1日目（後書き）

ついに高田が、殺ってしまった。

並みの中学生がこんなことをして平気でいられるはずがない！
これから、どうなる！？

再開そして永遠の別れ（前書き）

再開、別れ・・・。

こんなことになってしまふとは・・・。

再開そして永遠の別れ

”AMIDA” 2日目

「……………」

「ああ……………ん……………」

太陽がまぶしい。

「朝か……………」

「ここは……………ああ、そうか、やっぱり夢じゃなかったか……………」

昨日は、エックスの言ったことを思い出しながら、不安を抱きながら眠りについた。

この世界の太陽は、少し変だ。

でかい。ちょうど、目の前に野球ボールを置いたときの大きさだ。

熱くはない。ちょうど良くくらいだ。

「さて、行くか……………」

俺は、武器（TV）を持って、前に向かって歩き始めた。

途中で、俺はいろいろ思ってしまった。

家族に会いたい……………母は元気か？

他の組はどうなった？いつ帰れるんだ？

……………どれにしろ、生きなきゃわからない。

生き延びよう……………生き延びてエックスの正体を暴き、自由をつかみとろう！

皆も同じ思いだろう。

昨日は助かったが、もし、この武器が使えなくなったら、確実に俺は死ぬ。

これから、生半可な気持ちで進むのはやめよう。他の事を考えないようにしよう。

俺は、そう決意した。

「ふう、着いたか……………」

2度目の曲がり角。

「さあ、誰だ！」

曲がり角を曲がったその先には……。

……誰もいなかった。

「まだ来ていないのか？」

「来るまで待つ……か。」

面倒なルールだなあ、と思った。

それから、10分ぐらいしたところ、人が曲がってきた。

誰だろう？武器はなんだろう？まあ、いい。悪いが……。

「悪いが死んでもらうぞ！」

「そ、その声は……高田？」

この声は……！！

「う……内田……！」

内田が生きていた！良かった！

「内田！無事だったか……。」

「来ないで！」

！？

「ど、どうした急に？」

内田の体が震えているように見えた。

「言ってたでしょ！？殺しあわない場合どちらかが死ぬって！」

「……！！！」

俺は、唇を噛み締めた。

「おねがい！私を殺して！」

「そっぴゃあ、お前武器は？」

「……メリケンよ。」

「メリケン！？お前それでよくここまで……。」

内田は少し下を向いた後、泣きながら言った。

「杏子に会っちゃったの！それで、私、私……。」

私、大親友の杏子を……！！！」

そう言って、内田は手で顔を隠して泣き始めた。

「もういい、もう何も言わなくていいよ……。」
しばらく、沈黙が続いた。

「なあ、内……。」

「お願い！早く殺して！」

「そんなことができるかよ！」

「はやく！」

「無理だよ！内田を殺すなんて、俺には……！！！」

「高田……？もしかして……。」

やべ！ばれたか！？

なら、この際はつきり言うか……！

「そうだよ、俺は……。」

俺は、お前のことが好きなんだよ！悪いか！

小学校のころから気になってた！今、好きだということに気付いた
！」

それから、数秒、内田は、目を丸くしてこっちを見ていた。
しかし、すぐに笑顔になり、言った。

「ありがとう。高田……。」

内田……。

その瞬間。

「ガアアアアアアアアア！」

「！！！」

こんな時に！！

しかし、気付いたときには内田はつかまっていた。

「内田あ……！」

「高田、私も好きだったよ。今まで楽しかった！ありがとう。」
最後に、内田は、そう言っ、笑顔のまま……。

ギョーン！

引きずり込まれた。

「内田あああ……！」

ザアアア！

「ああ．．．！！」

ドチャ！

肉塊が．．．！！

「内田．．．内田あ．．．、

ああああああああああああああ！！」

内田を殺してしまった！

余計なことを考えないと決意したが．．．。

畜生オ！

「このテレビ！！このテレビのせいだ．．．！！
いや全てはエックスのせいだ！」

俺は．．．この怒りを胸にしまいこみ、
心を新たにし、前に歩み始めた。

「内田．．．許してくれ．．．。」

そして、その日の夜。

俺は、泣きながら、眠った。

「．．．ごめんな．．．内田．．．ごめん．．．。」

残り人数：１０人

再開そして永遠の別れ（後書き）

段々と、男らしさを増していく高田。

やっと芽生えた恋は、はかなく散る・・・。

内田との別れで、高田が得たものとは・・・？
次話もお楽しみに。

忘れていた存在（前書き）

今回の話は、記憶力のある人、この小説を、よく読んでくれている人なら、今回出てくる、ある人が、だいたい予想はつくでしょう。さあ、第7部、見てください！

忘れていた存在

3日目、朝。

「う．．．ん．．．。」

3日目の朝を迎えた。

「ん．．．？なんだ？みずたまり．．．？」

みずたまりがあり、顔がぬれて、目の辺りが乾いている。

「涙．．．？」

昨日の涙が、溜まっていた。

「こんなに涙って出るものなのか．．．。」

不意に、内田のことを思い出した。

私も好きだった。今まで楽しかった。ありがとう．．．。

その言葉が、頭から離れない。

それを、思い出すと、涙が出てくる。

昨日の夜は、5、6回は大泣きした。

しかし、今は泣けない。涙が枯れたということか．．．。

もう、内田のことを、余計なことを考えるのはやめよう。

先へ進もう．．．俺って、決意弱いなあ．．．。

「長いなあ．．．。もう2、3時間歩いてるんじゃないか？」

長く続いている道を、テレビを持ちながら、たびたび休みながら、

歩いた。

やっと曲がり角に着いた。

「やっと着いたか．．．。」

日は、もう、真上にある。

「さて次は誰だ？」

しかし、誰もいない。

「まだ来ていないのか．．．？」

そして、よく目を凝らすと、遠くに人が倒れている！あれは・・・

「う、牛島先生！！」

「・・・・・・・・。」

「先生どうしたんですか？」

「・・・・・・・・。」

「誰に、誰にやられたんですか！？」

俺がそう問うと、見慣れた行動を始めた。

「野球のサイン！？」

先生が俺に、何かを必死で伝えようとしている。

「バット・・・で・・・あ・・・ぐられ・・・て・・・。」

バットで殴られたんですか！？」

先生はコクツと頷いた。

「まさか・・・そいつって・・・・・・・・、

桜庭ですか！？」

先生は「ああ」と、口を動かし、

かすれた声で言った。

「・・・やつは・・・死んでる・・・かもしれん・・・。」

「何ですか！？」

「・・・やつは・・・俺を殺さず行つた・・・。」

「あ！で、でも・・・。」

「高田あ・・・もし・・・ぐふっ！おええ！」

「先生！もういいです！しゃべらないで！」

「ああ、良かった。俺はもう死ぬ。桜庭は生きているはずだ・・・。」

「

「しゃべらないで下さい！！」

「ふふっ・・・いい・・・じゃないか・・・もうすぐ死ぬんだし、

最期まで、

お前と、話させてくれよ・・・。」

「先生・・・。」

「高田・・・頑張れよ・・・ああ、お前の三振を取った時のあの、

見てるこつちが恥ずかしくなるような決めポーズ・・・。」
先生が涙を流し始めた。

「もつと・・・もつと見たかったなあ・・・！」
お前らが成長するのを、もつと・・・もつと見ていきたかったなあ・・・！」

もつと一緒に・・・野球をしたかったなあ！
笑顔を見たかったなあ！」

「先生・・・！！」

枯れたはずの涙が・・・また流れた・・・。

「先生！死なないで！」

その次の瞬間。

「がふっ！！ぐああ・・・！！！」

ガクンッ！

「先生！？」

「・・・・・・。」

「先生・・・！」

俺は、手を合わせたあと、先生に一礼し、その場から立ち去った。
迷ったら、前へ進め。

これは先生がいつも口にしていた言葉だ。

「先生・・・僕は絶対、あなたのことを忘れません・・・！」

しかし・・・あいつ・・・

「桜庭め・・・死ぬつもりか？生きようとする気はないのか？」

自分の武器で自殺はできない・・・

殺し合わなかった場合、どちらかが殺される・・・

よく考えたら、これは・・・このゲームの攻略法か！？

いや・・・あいつの一か八かの賭けかもしれないな・・・。

夜・・・

ふう、今日はなんだか、目が痛いなあ。
・・・泣きすぎか・・・。

カァン！

金属音がした！

ドスッ！

「ぐああ！！！」

寝転がっていた俺の、脇に何かが、当たった。
激痛が走った！

「い・・・てえええ！！！」

ぼ・・・ボール！？

「武士！立て！」

この声は・・・！

「桜庭あ！！てめえ！！！」

「武士！生き残ったやつが分かったぞ！」

「なにい！？」

「生き残ったのは、俺とお前と、こくとう だいすけ国塔大輔と、浩次だつてよ。」

「浩次！？浩次が生きているのか！？！」

もとぎ じつじ元木浩次、俺のキャッチャー恋女房。

「でも、お前が何でそんなことを・・・？」
「エックスから聞いたんだよ！」

「な、何！？」

俺も聞けばよかった・・・

「そこでだ、俺は今から、お前と・・・。」

「わかった。」

「・・・今までありがとう・・・武士・・・！」

ブン！！

ガッ！

「うわああー！！」

腕が折れた・・・か？

「武士！！」

「おいおい！心配なんかすんなよ！続けろ！」

ブン！！

今度はうまくかわせた！

「っ・・・！やべ・・・！」

今だ！

テレビを持ち上げ、桜庭の目の前に差し出した。

「グウオオオオオオオオオ！！」

よし、きた！

「悪いな・・・その武器は、牛島で攻略済みだ！」

「何！？」

ガスッ！

ゴッ！

バキ！

「ギヤアアアアアア！！」

「な・・・！？」

怪物が戻っていく・・・！？

「な、こいつって、本当は弱いんだぜ！知らなかったろう！？」
「なんだと！？」

だとしたら俺、勝ち目ないじゃん・・・！

「武士！苦しまないように殺してやる！」

「まだ死ぬわけにはいかねえんだよ！」

ブウン！

「！？」

「またテレビがついた！？」

「グオオ？グ・・・ゴアアアアアアアア！！」

さっきより、でかい手が出てきた！

ギユアア！ガシッ！

「う・・・くそ・・・速い・・・！！」

まさかこいつ・・・親！？

しかも、俺の意志で動いてるのか、こいつ？

俺が思った通りに動く・・・。

「く・・・動けない・・・！」

「そうだろう、こいつは、俺の意志で動くみたいだぜ？」

「・・・そうか。死ぬのか俺は・・・。」

桜庭は、涙を流し始めた。

「ああ、そうだ。俺もこんなことしたくないが、仕方ないんだ・・・。」
「」

「ああ・・・じゃあ、最後に教えてやるよ。」

「何をだ！？」

「エックスはなあ、俺だけに、教えてくれたんだよ・・・。」

「だから何を！？」

「生き残ったやつは助かるって言ってたのは、覚えてるな？」

「ああ。」

「これは嘘なんだってよ。」

「なんだって!？」

「いや、嘘じゃないけど・・・うん・・・」

桜庭は少し目をつぶった後言った。

「生き残れないってことらしい・・・。」

「どうゆうことだ!？」

「最後まで生き残っても、エックスの前に、”ダーク・デビル”と
か言う、

”AMIDA”最強のモンスターがいるそうだ・・・。」

「”AMIDA”最強!？」

「そうだ・・・。」

「・・・そんなの、やらなきゃわかんねえだろ!」

「ははっ、武士らしいな・・・。」

「桜庭・・・!」

「おい、ところで、お前、気づいてたか？」

「なにを？」

「エックスの声、聞き覚えないか？」

「え・・・え」と?

「ふう・・・堀口龍ほりぐちりゅうだよ!」

「あ!そう言われてみれば・・・。」

「あいつ、風邪で休んだろ。」

「あ!そうだっけ?気づかなかった!」

「お前・・・そりゃ、かわいそうだぞ・・・。」

「でも、なんであいつが・・・?」

そう言った直後、どこからか、声がした。

「教えてあげるよ。」

!!

「おい!お前、本当に堀口か!？」

「ああ、そうだよ。」

「おまえ、どうやって・・・!?」

「桜庭君。」

「なんだ？」

「君にはもう用はない。」

「分かっている。秘密をしゃべった時点で、俺の死は確定してるんだろ？」

「その通り。そこまで分かっているなら、もう決心したな？」

「パン！」

「カランカラン！コトツ」

「桜庭・・・!!」

「さて、残りはお前だけだな。」

「俺だけ？国塔と浩次は!？」

「ああ、あの二人は、俺は好きじゃないから殺したよ。悪い？」

「てめえ！」

「あいつら、俺のこといじめていたろ？他に俺が殺したやつも、俺のことを軽べつしたり・・・。」

「牛島もか!？」

「そつだよ！あいつも俺のこと信じない！」

「お前・・・!!」

「そこで寝て、一夜明けたら、まっすぐ進め。そこに、”ダーク・デビル”」

を用意する。夜が明ける前に進んでたら、お前を殺す。」

「まて！桜庭はどうするんだよ!？」

「ああ、今処分するよ。」

「シュン！」

「き・・・消えた!？」

「楽しみにしているよ。」

「・・・・・・・・。」

俺・・・・・・・・一人になっちゃった・・・。

堀口・・・・・・・・！

「お前こそ楽しみにしているよ！」

俺は、明日のためにすぐに寝た。

忘れていた存在（後書き）

主催者の正体はなんと、堀口だった！

次話、高田は、ダーク・デビルを倒し、堀口に
会うことができるか！？

（第7部終了）

THE END "AMIDA"

夜明け―

さ、行くか。

今日こそ現実世界に戻る！

まっすぐ続く道を、

まっすぐな気持ちで

まっすぐ進んだ。

欲を言えば、皆を帰してほしい。

この"AMIDA"の意味も、やつから聞かなきゃならない。

俺は、いろんなことを胸にしまいこみ、ただひたすら前に向かって歩いた。

今、この世界にいるのは、俺と堀口だけだ。

到着

「さあ！出てこいよ！ダーク・デビル！」

「ふふふ、やっぱりきたね。」

「どうした？こっちは準備OKだぜ！」

「武器はどうしたんだい？」

「武器は、置いてきた！」

「どうしてだい？」

そう、俺が何故武器を持ってこなかったかと言つとー

今朝、いきなり電気がついて、中から、例の化け物が飛び立ち、その後消滅したから。




「そつちこそ、ダーク・デビルを早く出せよ」

「ふふ、わかったからあせるなよ。バーカ。」

「ちつ、てめえ、おぼえとけや。」

「これに、見覚えはあるだろ？」

「何？」

「  ！」

「・・・何語ですか！？」

「いでよ！ダーク・デビル！」

「最終的に日本語！？」

ブー……ン……。

「グオオオオオオアアアアアアアアアア！！」

こ……こいつは！

「こいつは……！」

「そうだ、テレビの化け物だよ。よし、あいつを殺れ。」

「そんな……。」

「グアアアアアアアアアアアアアア！！」

一瞬で俺はやつに捕まった。

メキメキ……ミシツ……ゴキ！

「うああああああああああああ！！！」

「最後に……君だけに言おう。」

「……！？」

「もしかりに、君が、こいつを倒しても、僕は君を殺していた。」

「な……。」

「これから、僕は、死神ギヤスティアからもらったこの力で、地球

を滅ぼす。

君達は、僕のこの力の、練習相手に過ぎなかった。」

「・・・・・・・・!!」

ミシミシ・・・・メキ・・・・

「ぐああ・・・・」

「高田・・・・君だけは僕に優しく接してくれた。君がいたから僕は今までやっていけたんだ・・・・。」

「じゃあ・・・・なんでこんなこと・・・・お前が・・・・?」

「君だけじゃあ、僕は生きていけない・・・・。親からも・・・・友からも・・・・」

先生からも・・・・僕は全ての人に見放された。そんな僕を誰が必要とする!？」

「・・・・堀口」

「そんな苦しい時にギヤスティアから、この力を授かった。僕はこの地球を滅ぼし、その後に僕も死ぬ。」

「お前・・・・バカだろ。」

「な・・・・!!」

「お前の周りのやつが嫌だったんなら、お前が勝手に自殺でもすれ

ば、俺の望む生活が
できたのに。」

「なんでおれが……。」

「……すまん、言い過ぎた。さ、早く殺せ。」

「……。」

「どうした？」

「くそ！」

「……？」

「やはり、できない！」

『約束が違うな』

この声は……!？

「ギャ……ギャスティア！」

『お前は私の代わりに地球を滅すといったはずだが……』

「すまない、ギャスティア。僕にはやっぱりそんなこと……。」

『黙れ』

「……!!！」

『そこのお前は筋がいいな・・・よし・・・ハッ!』

「グオアアアアアアア!」

「な・・・ダーク・デビルが・・・!」

消滅した!

『私と一緒に行かないか?』

そういったのと同時に堀口が現れた。

「く・・・そ・・・!」

「堀口!大丈夫か!?」

「ああ・・・ありがとう・・・畜生オ!」

死神も現れた。

『さあ、どうだ?来ないのか?』

「おれは・・・」

「・・・高田」

「・・・なんだ?」

「君が望む世界・・・か。(何とか僕の力で)」

「え？なんて言った？」

「こいつの答えはNOだ！さあ、殺してみろ！」

「堀口……。ああ、そうだ！さっさと殺せ！」

『いいだろう、やはり人間などに頼らず、自分の力でやればよかったな……。』

『フンッ！』

俺達は、大きな光に包まれた。

「う……。ん」

ここはどこだ？

「あれ……。ここは？」

俺の部屋だ。

「夢……。だったのか？」

「おーい！武士ー！」

こ……。この声は！

俺は、部屋の窓を勢いよく開けた。

「さ・・・さ・・・桜庭あ！生きてたのか!？」

「何ねぼけてんだよ！ほら、さっさとしないと遅れるぞ!」

「あ・・・ああ!」

やっぱり・・・夢だったんだ!

「ゴメンゴメン!」

「おつせーよ!さ、行くぞ!」

ザワザワ・・・

「はいじゃあ、みんなバスに乗ってくださいーい!」

・・・あれ、そういえば堀口は!?

「はい、じゃあ風邪で休みの堀口君以外・・・」

休み・・・まさか!?

『心配しなくても大丈夫だよ』

!!

「堀口!？」

「え．．．ええ、堀口君は休みだよ．．．。」

クスクス．．．

「僕の声は君にしか聞こえないよ」

．．．!

「君はもう死んでいるよ。」

「じゃ．．．じゃあ、何で今．．．」

「僕の力で、君を3日間夢の世界で生かすんだ」

「な．．．!？」

「そう、あれは夢じゃなかったんだ。もう僕たちの地球はないんだ」

「．．．!」

「3日間．．．楽しんでね．．．」

「ああ．．．」

「死神に殺された僕たちは、一生の地獄が待っている。だから、それまでの間．．．」

「幸せに．．．僕は、もう捕まっちゃった。君は安全だよ。」

『・・・ありがとう』

1日目・・・

修学旅行先で、色々見て回った。

夜・・・

うまいものいっぱい食べて、たくさん遊んで、夜更かしをした。

2日目・・・

班別自由行動で、名物などを見たり、買ったりした。

夜・・・

内田を呼び出した。

「何？話って？」

「内田・・・俺、お前のことが・・・」

「・・・あ」

「好きです！つくつ、付き合ってください！」

「・・・ぶつ、噛んでやんの！」

「・・・！」

「いいよ、別に」

うおっしやあああああああ！！

キタアアアアア！！

3日目・・・最終日・・・

個別自由行動で、内田と一緒に見て回った。
とても楽しい。

どうか、終わらないでほしい・・・。

そして、夕方・・・

帰りのバスで、富山まで帰った。

家に帰って、すぐに眠ってしまった。

「もうすこし・・・もうすこ・・・し・・・だけ・・・」

・・・ここは？

真っ暗だ。

何も見えない・・・。

動けない・・・。

誰か助けて・・・。

ここが・・・地獄？

ああ・・・誰かが来た・・・。

痛い・・・だが、どこをやられているのかわからない・・・。

痛い。

ああ・・・。

・・・ここは？

痛みがない？

また誰かが来た・・・。

痛い・・・まだ、どこをやられているのか・・・。

ここは・・・またか・・・。

もういやだ・・・やめてくれ・・・

痛い・・・痛いよ・・・

・・・またか。

もうやめてくれよ・・・

いつまで続くんだ・・・

『一生の地獄が待っている』か・・・。

一生か・・・。

死にたい・・・

ああ、なんで俺がこんなめに・・・

痛いよ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5605d/>

A M I D A

2010年11月12日11時32分発行